# 学級風土のアセスメントを用いた学級理解の促進

講師　お茶の水女子大学生活科学部講師　伊　藤　亜矢子

2001. 7 .26

今日は，学級風土のアセスメントを用いた学級理解の促進についてお話ししたいと思います。人それぞれに性格があるように，学級にもいろんな性格があります。あのクラスはこんな性格だな，このクラスは全体としてこういう特徴があるなという風に，クラスの特徴があります。学級風土は簡単に言えば，そのような学級の個性です。

以前私はスクールカウンセラーをしていたのですが，Aさんなら Aさんという方にアプローチするときには，Aさんがどういう方でどういう問題を抱えてらっしゃるのかをはじめに見立てます。それと同じように，学校の先生方はクラスにアプローチされる。スクールカウンセラーも先生方のお手伝いをするかたちでクラスにアプローチする。そのときにはAさんを見立てるのと同じようにクラスを見立てること，つまり，１年１組なら１年１組はどんなクラスなのかということを知ることが大事ではないかと考えました。ですから，学級風土質問紙は，クラスの個性を捉えて見立てるための道具です。言ってみればクラスの性格的テストにあたるようなもの，クラスのエゴグラムのようなものと思っていただければと思います。

それではまず，質問紙がどのようにつくられたものか，その特徴についてお話しします。

私は最初，どうやってクラスの特徴を描き出したらいいのか全くわかりませんでした。そもそもクラスに特徴があるのかということさえわかなかったのです。そこで，いろいろな学校に行かせていただいて，クラスを拝見させていただきました。そして，こういう特徴がこのクラスにはある。このクラスと，例えば隣のクラスの違いを弁別できるような質問項目はなんだろう。そんな風に考えて質問項目をつくっていきました。同時に，生徒さんや先生方に面接して，クラスの特徴をきいてみました。中学生に面接で「このクラスどう？」と聞くと，生徒達はなかなか味わいのあることを言ってくれます。「楽しいけれど，でも心から楽しめない」，「先生は怖いんだけど，でも笑っちゃうところがあって，ちょっと迫力がないんだ」などと，とても微妙な特徴を子どもらしい言葉で話してくれました。そういった生徒の言葉も項目にしてみました。そうすることで，そこにいる生徒の実感を大事にしたいと考えました。

また一方で，いろいろと文献などを調べてみますと，実はアメリカやヨーロッパでは，クラスルームの個性をはかるスケールがいくつかつくられていることがわかりました。世界的に利用されているメジャーな質問紙もありました。そこでそうしたスケールの項目や理論的背景にも注目して，質問紙の理論面からの検討を試みました。既存の質問紙と自作の項目をすり合わせて，どこが違うか，どういう項目が足りないのかなどを検討して，質問紙を練っていきました。

次に，学級風土質問紙の具体的な内容です。

質問紙は３つの領域にわかれており，合わせて８つの尺度から成っています。３つの領域とは何かというと，「関係性」，「個人の発達と目標志向」，「組織の維持と変化」の領域です。これは，人間は環境に大きく影響されるというムースという著名な研究者が主張したもので，広く一般に環境というものを捉える際に必要な３つの領域といわれています。これらのうち，スクールカウンセリングやメンタルヘルスという観点から，生徒のメンタルヘルスと関わりが強いとされている「関係性」の領域に重点をおいて尺度をつくりました。

「関係性」の領域にはまず，「学級活動への関与」という下位尺度があります。これは学級としてのクラスの活動への関心の仕方とか取り組みの熱意，行事を一生懸命やっているかとか，誰もがクラス全体のことを考えているかとか，そういうことを聞いています。

次に「生徒間の親しさ」尺度があります。これは，生徒同士の仲のよさです。このクラスはお互いにとても親切だとか，このクラスでは男女一緒におしゃべりしたり遊んだりするというようなことです。男女の仲の良さを聞く項目は，欧米の質問紙にはないのですが，日本の学級を見ていると，男女の仲のいいクラス，交流のないクラスというのがあって，比較的それが大きな特徴になるように思えたので，質問紙に取り入れました。

それから「学級内の不和」尺度です。グループ別れや，

学級内の緊張感，重苦しい雰囲気などを聞いています。「不和」は「生徒間の親しさ」と単なる反転ではないかとよく聞かれるのですが，少し違っております。「生徒間の親しさ」は，個人レベルで生徒が仲よしかどうかという，個人間の関係の全体的傾向を聞いています。それに対して「学級内の不和」は，クラス全体が重苦しいとか，バラバラになっていきそうだとか，組織レベルでの不和な兆候を聞いています。

さらに「学級への満足感」尺度があります。これは，学級が心から楽しめる場かどうかとか，このクラスになってよかったかというような項目を含みます。

また，「自然な自己開示」尺度があります。これは私が特に注目している尺度です。自己開示ができるか，自然な感じで，クラス内で自己開示できるかなどです。この尺度には，先生のそばにいても遠慮なく話ができるか，先生に素直に自分を見せるか等という項目を入れています。これによって，先生と生徒の人間関係も少しわかってきます。

以上が「関係性」つまり人間関係に関する尺度です。学級内の人間関係の特徴を，なるべくきめ細かく見られるように，あえてこの部分は項目を多くしています。

他方，「個人発達と目標志向」の領域では，勉強熱心だとか，成績を競い合っているとかという，「学習への志向性」尺度があります。

最後に，「組織の維持と変化」の領域にあたる「規律正しさ」と「学級内の公平さ」尺度があります。「規律正しさ」は，学級内の秩序，比較的静かできちんと授業を聴くクラスかどうか，守るべき規則がはっきりと示されているかどうか，規則を守るかどうか，などです。最後の「学級内の公平さ」は，子どもたちの同等さ，仕切ろうとする人がいるかとか，自分の意見を押し付けようとする子がいるかどうか，あるいはみんなの意見が平等に扱われるかどうかなどです。

このように，項目内容は，なるべく具体的な内容にしています。尺度だけでなく，一つ一つの項目をみていくことで，より具体的な学級風土がわかるとよいと思っています。

では，実際にこの質問紙を利用してどういうことができるでしょうか。

一つは質問紙の結果から，生徒が学級風土をどう感じているか。生徒の実感が伝わるということがあります。先ほどご紹介したような項目を生徒に尋ねることで，生徒が学級に対して感じていることが分かります。これは，逆に言えば，「生徒の感じていること」ですから，本当にそうであるかどうかは分かりません。例えば，行事に一生懸命がんばっていると生徒は回答していても，実際にはどうか。誰かの客観的な評定ではないので，事実とは必ずしも一致しないかもしれません。けれど，そこにいる子どもたちの実感として，子ども達は一生懸命と感じているのだ，ということは分かります。そういう意味で，先生と生徒の感じ方の違い，あるいは両者が同じかどうかを確かめることができます。

加えてそれ以外にも，継続的に質問紙を実施することで，学級の個性と変化を捉えることができます。また学級の個性を捉えることで，先生方同士でクラスの像を共有することができます。先生方はあえて質問紙をしなくても，クラスのことはわかると思われるかもしれません。けれどやってみるとおもしろいのは，エゴグラムや性格テストのように，わかっているけれど，結果をみると自分の性格が一層はっきりして面白い。そうだその通り！と確認したり，新たな小さな発見もあるかもしれません。それが性格テストの面白さであるように，質問紙によって客観的に風土を捉えてみることで，学級像がより一層明確になり，自分の捉え方が確認できる，そしてそれを媒体にして先生同士や，先生とカウンセラーの話が深まり広がっていく。そういうことが学級質問紙を通してできるのではないかと思っています。

一つ具体的な例をお話したいと思います。ある学級では，質問紙の結果，「勉強はまじめにやらないし，行事も熱心でないし，みんなあまり親しくはない，だけどまあそこそこ満足していて，クラスは民主的に運営されていて，先生への不満はあまりない」という風土が質問紙から得られました。ここで特徴的なのは，「学習への志向性」が比較的低くて，特に，男女でいうと女子が非常に低いということがありました。なぜ女子の「学習への志向性」が低いのだろう，このクラスはどうなっているのだろうか。男の子はまじめにやっていて，女の子はよほどの不良少女なのか，あるいはもっと違うことがあるのかと考えさせられました。一方，同じ学校内でも，かなり違ったタイプの学級風土も見られました。「クラスへの関与が高く，みんな仲がよくて，重い雰囲気はない。自己開示もできるし，学習はあまりやっていないけれど，規則も守って民主的な運営もされている」という，比較的満足感が高い風土です。

このような質問紙の結果に関して，発表の際にはクラスの名前を出さないで，これは何組でしょうと先生方に推測していただくようにしました。そうしたら，まっさきに自分の学級を当ててくださったのは，一番大変な思いをされている先生でした。実はこのクラスではこうい

うことが問題になっているということをいろいろ語ってくださって，周りの先生方も，ああ，そういうことがあったのかということになりました。実際に風土のグラフが示されることで，実はそういう風土の背景に女子の不満があり，そのまた背景には男子の問題があるというような学級の現状分析が，質問紙結果を媒体に深まっていきました。

そのあと数ヶ月経って，その先生に，質問紙とそれを媒体にしたコンサルテーションの感想をお聞きしてみました。先生は，質問紙をやる前は，悪い結果が出て自分への批判が高まるような気がして嫌だと思ったけれども，やってみたら逆にほっとしたと言われました。日々苦労して，なんともうまくいっていないと自分は思っているけれども，それは自分だけの思い込みかもしれない。しかし，質問紙をやって，自分の思いこみだけでなく，子どもたちも実際こういうふうに感じ苦しんでいたということがわかり，自分だけの思いすごしではないし，そこにはいろんな原因があったんだということが客観的に見えてきた。そしてそれを，他の先生と共有することで，周囲の先生からも，いろんな形での励ましの言葉や実際に生徒を指導してくださることが増えてとてもよかったというお話でした。

心理学に外在化という言葉がありますが，自分のなかに何かがあって，それを客観的に見ることができず，「何だか分からないけれどどうにもならない」状態になると，いきおい自分だけで鬱々として行き詰まってしまうかもしれません。けれど，いったん問題を外に出して客観的に見直すと，「なるほどこういうことがおこっていたのか」と気づいたりもします。外に出すことで，みんなもわかってくれるし，自分ももう一度見直すことができる。そしてそれを共有することができれば，そこを出発点として，対応策を考える事ができる。そんな問題解決過程の媒体に，学級風土質問紙は使えるのではないかと思っています。

実際に，実はこのクラスは隣のクラスとそっくりで，その隣も似ている。つまり学年や学校全体で同じような課題があったのだと分かってきて，そこから次年度に向けて，クラス替えや，学年・学校全体の生徒指導のなかでこんな工夫をしよう，あんな工夫をしようということを先生方が考えてくださる例もありました。また，うまくいっているクラスについては，なぜうまくいったんだろうという話になり，実はこの担任の先生はこんな工夫もしていたのではないか，あの工夫がよかったのではないかなど，先生方があらためて実践を共有して検討するということもありました。

以上のように，学級風土という目に見えないものを，学級風土質問紙で少し目に見える形にすることで，あらためて学級で生じていることを検討し合い，先生方の工夫を蓄積し，学級づくりや学校づくりを促進する手がかりになったらよいなと考えております。

現場の先生方のご意見をとりいれながら練ってきた質問紙です。どうぞもし興味のおありの先生がいらっしゃいましたら，ぜひご一緒に，質問紙とその利用法を検討していけたらと思います。どうもありがとうございました。